

# 海部の犬猟におけるヒトとイヌとの相互行為

民俗班

内藤 直樹<sup>1\*</sup> 鈴木 咲季<sup>2</sup>

**要旨：**本稿の目的は、海部の犬猟におけるヒトとイヌとの相互行為の生産と再生産について考察することにある。そのため、徳島県海部郡海陽町の海部猟友会が実践する犬猟を対象に、①狩猟の場におけるヒトとイヌの相互行為という共時的側面と②相互行為の再生産に関わる猟犬の繁殖や育成という通時的側面を検討する。

**キーワード：**海部犬、集団猟、相互行為、アッサンブランジュ、家畜化・栽培化（ドメスティケイション）

本論の目的は、海部郡海陽町の犬猟におけるヒトとイヌとの相互行為の生産と再生産について考察することにある。そのために徳島県海部郡海陽町の海部猟友会が実践するイヌをもちいた集団猟の諸相を明らかにする。この地域のイヌは、猟師たちの間では「海部犬」と呼ばれてきた。海部猟友会は、罠猟の制限や猟犬の治療・埋葬費用の負担等の、犬猟をしやすくする独自の制度を整備している。だが近年では狩猟者とくに犬猟師の減少により、海部犬を用いた犬猟の衰退が著しい。ある地域において実践されてきた犬猟の衰退は、生物（イヌの品種）と文化（イヌの繁殖・育成法および狩猟法に関する知識や技術）双方の多様性の減少を意味する。本論では、①狩猟の場におけるヒトとイヌの相互行為という共時的側面と、②相互行為の再生産に関わる猟犬の繁殖や育成という通時的側面の検討を通じて、この地域のユニークな「ヒト（イヌ）からイヌ（ヒト）への働きかけと応答の連鎖」の諸相を明らかにする。

## 1. 海部の犬猟

海部猟友会の会員は2020年現在19人で、銃猟免許

保持者は15人、猟犬を飼っている人は6人である。猟犬の飼い主は一人につき5～10匹程度個人で育てており、イヌを用いた銃猟が中心的に行われている。会員のN氏は、娘のT子さんとYさんらと共に猟犬を15頭飼っている。

犬猟とは、イヌを用いた猟法であり、日本においては、総じて少数の犬が総合的な役割をこなせるように訓練及びブリーディングをおこなう場合が多い。犬猟は単独猟と集団猟の2種類に大別されるが、海部猟友会では主に集団猟が行われている。海部の犬猟においては、多数の待子（マチコ）が狩猟をする山を四方で囲み、少数の勢子（セコ）とイヌが獣を追い立てて捕獲する巻狩りの方法がとられる。犬猟の獲物はイノシシとシカである。

勢子はイヌを連れて山をある程度登るとリードを解き放す。イヌは猟師とつかず離れずの位置を維持しつつも、動物の匂いや気配を探知する。ソウサクとは、獲物のにおいから居場所を突き止める能力であり、そこでは集中力や鼻の良さが問われる。また、ナキとは獲物を発見した時にイヌが吠える行為を指し、これにより猟師は獲物の位置を把握する。特に

1 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 2 徳島大学総合科学部卒業生

\* 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1 徳島大学総合科学部 naito.naoki@gmail.com

獲物を追いながら吠えるオイナキは、位置把握のために重要である。ナキは、獵師だけでなく他のイヌにも獲物がいることを知らせることで、より多数のイヌを獵に参加させることが出来るため、イヌの受傷や獲物の取り逃がしを防ぐためにも非常に重要である。ナキを聞いた獵師は、イヌに取り付けたGPSや無線機からの情報を頼りに無線で他のメンバーと議論しながらイヌの位置を特定し、獲物が逃げ込みそうな場所に近くの待子を待機させる。そしてイヌが獲物を追いこんできたところを銃殺、あるいは刺殺する。イヌは獲物に繰り返し噛みついて弱らせ、時には集団で組み伏せて動けなくしてしまう。だが、このときにイヌが獲物による反撃を受ける可能性も高い。

## 2. 「いい犬」とはなにか

イヌのブリーディングは、獲物が取れるかどうかの結果に直結する重要な介入であると多くの犬獵師は認識している。それゆえ生殖管理は犬獵を構成する重要な要素である。

イヌは山をある程度自由に移動しながら獲物を探索することが期待される。ソウサクは集中力や嗅覚の良さが求められる重要な能力である。とくに海部獵友会は高齢化が進み、集団獵に参加できる人数と運動能力が減少しているため、ヒトが獲物を追いかける力が弱まっている。このため、イヌがソウサクし、ヒトに獲物の居場所を伝えるためにナクことに加えて、獲物を噛んで止めておく力（カミ）も重要なになってきている。このように海部の犬獵では、ソウサク、ナキ、カミができることが「いいイヌ」とみなされる条件である。

ほとんどの場合、犬獵師は常に自分で獵犬を繁殖し、訓練している。これは獵犬の寿命に関係する。2015年までにN氏が飼育してきた31頭の獵犬のなかで、10年以上生きた個体は1頭である。獵犬の死因として最も多いものは狩猟中のイノシシからの攻撃による怪我（10頭）である。また、狩猟中の行方不明（3頭）と事故（2頭）を含めると、死因の約半数は狩猟に関連する。このように獵犬は常にケガや死と隣り合わせの生活を送っているために、犬獵師は常に「いいイヌ」の再生産を実践している。

ブリーディングは、犬獵師が「いい」と思うイヌ同士を交配させることでおこなわれる。2015年までにN氏が交配を検討した54頭の獵犬のうち、一度も交配経験が無いイヌは28頭（55%）である。また、交配経験1回のイヌが15頭（28%）、2回のイヌが3頭（4%）、3回のイヌが5頭（9%）、4回のイヌが3頭（4%）である。交配経験が無いイヌが半数以上になるため、何らかの選択はなされていると考えられるものの、2回以上交配させるイヌも17%にすぎない。

ブリーディングは、特定の個体の形質や行動に注目し、それを相続させようとする意図に、飼い主の好みやジンクスが加わったものになっている。そもそも行動は単純に遺伝するものではない。たとえばソウサク、ナキ、カミの全てが優秀だった獵犬テツの子供であるセレスは脚力に富んでいた一方、リンゴはソウサクを得意とし、イチゴは獵犬としての能力を発揮することができなかった。

このように、N氏の生殖管理には曖昧な面があるため、期待したような形質や行動が子犬に見られない場合がある。また、イヌがヒトの計画とは異なる相手との子犬を産んでしまう場合もある。これは、ある特徴を備えたイヌの個体や個体群の特徴を、世代を超えて固定させようとしてきたイヌのブリーディングの歴史とは異なる実践である。にもかかわらず、なぜ狩猟に必要なソウサク、ナキ、カミという一定の能力をもつ獵犬の再生産が可能なのだろうか。この点を理解するためには遺伝だけでなく、ヒトとイヌの相互的な関係に注目する必要がある。

獵師は、まず実践的な訓練を通じて仔犬の潜在能力を見極め、その個体が獵でどのように役立ちうるのかを考慮する。具体的には、捕獲したイノシシの幼獣を訓練用の餌に入れることで、①仔犬の反応を見極めたり、②経験豊かな獵犬の反応を見せて学習させるといったことが繰り返しあなわれる。こうした見極めや学習過程を通じて、犬獵に適した能力をもつイヌが選択され、その能力が強化されていと考えられる。つまりブリーディングは個体がもつ能力の相続やコピーを意図した生殖管理によるところが大きいが、海部の犬獵においては訓練を通じた能力の再生産も重要なである。

### 3. ヒトとイヌのアッサンブラージュ

犬猟は、ヒトがイヌを道具のようにもちいて、動物を狩る技法である。そこで猟犬は自由に山中を駆け回って獲物のソウサクをおこなって獲物を発見し、激しくナイたり、獲物をカンだりすることで、むしろヒトに「こちらに移動しろ」、「獲物を撃て」と働きかけているように見える。このような猟法が可能となるのはリョウヨクという狩猟への「欲望」がイヌに内在しているという猟師の認識に基づいている。一見したところ、これはイヌの主体性（エージェンシー）に思える。だが、リョウヨクは、ヒトによるブリーディングや訓練によって「つくられたエージェンシー」であり、人はこれを「道具」として利用していた。だが、ひとたび「つくられたエージェンシー」は、それをつくったヒトに対しても、あくまでエージェントとして働きかけるようになる。その時、ヒトはイヌのエージェンシーに対するペーシェント（客体）になる。例えばイヌは、獲物を発見すると合図としてナク。ヒトはそれに応答して待機場所を変更し獲物が逃げ込んでくるのを待つ。

また、イヌがソウサクに出かけたものの獲物が見つからず、猟師の元へ戻ることがある。このときヒトがどのように反応するかを見て、イヌはソウサクを続けるか、ソウサクをやめてヒトに寄り添つてついて歩くかを判断している。このように海部の犬猟におけるヒトとイヌは互いに「エージェント（能動態）／ペーシェント（受動体）」の関係を攪乱し、多層的かつ反復的な関係を見せる。このように見ると、猟犬はエージェントのようでもあり、ペーシェントのようでもある。その時ヒトもまた、ペーシェントのようでもある存在として犬猟の場を構成する

アクターとなる。このような犬猟の場は、「つくられたエージェンシー」をもつ道具としてのイヌと人が相互に働きかけ合う、「動く連なりとしてのアッサンブラージュ（集合体／連関）」(Gell 1998, 小山田 2011) としても見ることができる。それはイヌとヒトが一体になっているかのように見えるさまに他ならない。

これまでのドメスティケイション（家畜化・栽培化）研究においては、ヒトが一方的に他生物を馴化（じゅんか）してきた点が強調されてきた。だが、イヌの家畜化過程を考える上では、「イヌからヒトへの働きかけ」も重要だった（シップマン 2015）。それは介入許容といったヒトの介入への受動的な働きかけよりも積極的な、イヌの側からの働きかけである。現在まで続くヒトとイヌとの関係形成について理解するためには、イヌの祖先種から連綿と続いてきたヒトとイヌの相互交渉の過程を理解することが重要であると考えられる。

### 参考文献

- 内山田康. 2011. 「《特集》動くアッサンブラージュを人類学する一序」『文化人類学』76(1) 1-10.
- 太田至. 1995. 「家畜の群れ管理における「自然」と「文化」の接点」福井勝義（編）「地球に生きる—④自然と人間の共生」雄山閣, 225-248.
- 佐藤咲季. 2016. 「イヌ人間と人間イヌ：徳島県海部郡海陽町におけるヒトと猟犬のアッサンブラージュ」徳島大学総合科学部社会創生学科地域創生コース卒業論文.
- 重田真義. 2009. 「ヒト—植物関係としてのドメスティケーション」山本紀夫（編）『ドメスティケーション—その民族生物学的研究』国立民族学博物館, 71-96.
- 谷泰. 1995. 「家畜の起源をめぐって—考古学的意味での家畜化とは何だったのか」福井勝義（編）「地球に生きる—④自然と人間の共生」225-248 雄山閣.
- パット・シップマン. 2015. 河合信和 [監訳], 柴田譲治 [訳]. 『ヒトとイヌがネアンデルタール人を絶滅させた』原書房.
- Gell, Alfred 1998. Art and Agency. Clarendon Press.

